

〔論文〕

子ども・保護者・支援者が共に主体的である 子育て支援の可能性について

—子育て支援スペースにおける支援者への インタビュー調査を手がかりに—

弘 田 みな子

* はじめに

少子化の加速する現在、幼児教育施設における保育のみならず、子育てに関わる全ての支援において、その機会の拡充に加え、質の向上を伴った重層的なサポート体制が求められている。施策面においても、1994年に発表の「エンゼルプラン」以来、社会における子育て支援の機会は拡大した。国や公共団体による子育てを支援する仕組みが構築されてきている一方で、子育てをめぐる責任の所在については「家庭」にあるとする、いわゆる「子育て私事論」も未だ根強い¹。そのため、種々の「子」育て支援は、「子育てをする保護者」の支援を中心とすることで、子育ての社会化と子どもに対する責任の家庭への内在化との間のバランスを保っているとも言える²。子育てに関する支援において「保護者」支援が大切である、ということの意義は認知されている³が、一方で子育て支援における「子ども」自身に対する効果的な支援のあり方は、幼児教育施設における子どもに対する保育のあり方と同程度には厳しくは問われていないのも現状である⁴。

また、近年の子育て支援をめぐる新たなキーワードとして登場した「無園児」⁵と呼ばれる支援対象の区分についても考えてみたい。現在、幼稚園や保育所等何らかの幼児教育施設に所属せずに家庭において過ごす子どもの事を「無園児」と呼び、0～5歳児のうち約195万人が該当する⁶。これら、幼稚園や保育所、認定こども園に通っていない親子の孤立等を回避する視点から、幼児教育施設の定期利用等の機会の拡充を目指していくという支援の新たな方向性が示されている⁷。子育て支援策の選択肢や選択できる対象が増えることは、園での保育を活用したいと考える保護者にとってより望ましいことであると言えるだろう。また、少子化における幼児教育施設の運営面からも、今後の新たな利用者層の拡大は喫緊の課題であると言えるだろう。一方、「無」園児という呼び方にも表れるように、何らかの「園」=施設に属しているか否かという区分により親子を分類し、施設における保育へと積極的に繋いでいくことは、親と子が家庭において時間を過ごすという選択肢をより選択しにくくなるような風潮を作る可能性には意識的である必要があるだろう。子育て支援のみならず、介護・看護等を含めた「ケア」全般について論じる中で上野（2011）⁸は、「要介護高齢者」という概念を取り上げ、『要介護高齢者』という概念そのものが、『介護を要する（介護されるべきでありながら、適切な介護を受けていない可能性のある）高齢者』という規範的な判断

を含んでいる」とし、「高齢者にとっての『あるべき状態』『のぞましい状態』が前提されていないければ、そもそも『要介護状態』の判定など不可能」と指摘する。これは、「無園児」という概念の創出により、子育て支援を促進しようとする場面においても該当する視点であるのではないだろうか。つまり、「園」で過ごすという子どものあり方や、「園」で過ごさせるという保護者のあり方が「あるべき状態」「のぞましい状態」との規範が前提されているからこそ「無」園児の支援という視点が生じているとする捉え方である。そのような視点から、「無園児への支援の拡充」という事象を捉え直してみると、親子の様々な過ごし方や支援の手段が拡充する一方で、例えば「一般型（ひろば型）」子育て支援施設等を活用しながら家庭で子育てを行うという様な選択肢に前向きな意味づけがし難くなるかもしれないという問題をどのように位置付けていくのか、と考えることもまた大切であると言えるだろう。

幼児教育施設における保育を含む、種々の子育て支援の形態及び目的は、大別すると、「保護者から子どもを預かる」・「保護者の居場所となる」・「保護者の悩み相談に対応する」・「保護者同士の交流を促進する」・「保護者への情報提供を行う」・「給付及び減免等の経済的支援」等に分類される。これらにおいて、支援者が子どもを直接預かる、幼児教育施設における保育や一時保育等のタイプの支援の場では、保護者はその場には同席しておらず、保護者が同席で行う子育てひろば等のタイプの支援の場では、保護者自身が子どもと関わるのが主とされ、支援者はその環境の調整を主として担う。つまり、子育て支援の場においては、子どもに対して保護者と支援者が同じ場において共に直接働きかけていく形態での関わりのある方は主要なものとは言えない。

また、子育てひろば等の場においては、支援者が子育て経験者である等の「当事者性」が重視され、支援のプロではなく育児経験者等の「素人」であることの特性がその活動の遂行のために重要な価値づけをされる等、支援者の個々のスキルや専門性を背景に消失させることにより保護者の主体性を担保するような、「黒子」としての支援のあり方も指摘されている⁹。

長らく、「子ども主体」であることに価値づけられてきた幼児教育施設における保育のあり方について、近年では「保育者の主体性」の再定義を通して、保育をめぐる「主体」のあり方の再考がなされている（浅川2009, 中村他2020）¹⁰が、子育て支援施設における支援の文脈においては、支援に関わる子ども・保護者・支援者それぞれの主体のあり方やその関係性を問う詳細な議論は多くはない。

本論では、従来、「保護者」の休息や、親としての主体性を育むことが目的とされてきた子育て支援の場における、「子ども」自身の主体性や、「黒子」として在ることに価値づけられてきた「支援者」自身の主体性が同時に担保される可能性について改めて論じていく。以上の観点より、子育て支援に関わる「子ども」「保護者」「支援者」の3者の主体のあり方を問うことにより、子育てひろば等の子育て支援の場の意義や課題を改めて明らかにしたい。またそれを通して、幼児教育施設における保育を受けられないという消極的理由によるのではない、親子ごとの様々な子育てのあり方を効果的に支援するための、「無園児」支援の可能性についても示したい。考察の対象として、子

育て支援の場における、支援者へのインタビュー調査における語り、及び、支援場面における筆者による参与観察時の観察記録を中心に取り上げていく。

1. 一般型（ひろば型）子育て支援の機能分類から考える子ども・保護者・支援者の関係性

1. (1) 「地域子育て支援拠点事業」における支援の種類

現在、多様な子育て支援策が整備され、必要に応じて様々な支援を受けることが可能になっている。その中でも、「地域子育て支援拠点事業」として2007年度に整備された、子育て世帯の親子が住む地域において、保護者の就労の条件等なしに親子で利用できる支援サービスは、令和3年度には届出のある施設で7856か所ほどあるとされ、多くの子育て世帯において、近隣の施設を利用できる状況が整ってきていると言える¹¹。この、「地域子育て支援拠点事業」は、一般型（ひろば型）、一般型（センター型）、連携型（児童館型）と、その運営の規模や条件により類型が分かれており、それぞれの事業の共通の目的としては、①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、②子育て等に関する相談・援助の実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施が挙げられている¹²。

この中で、施設数として最も多く全体の8割を占める¹³一般型のうち、「ひろば型」とされてきた子育て支援施設は、地域における公共施設の空きスペースや民家、マンションやアパートの一室、保育所・幼稚園・認定こども園、商店街の空き店舗等を利用して運営されており、日常生活の中で、気軽に立ち寄れる地域社会における子育て環境の場として、その整備が進められている。「一般型（ひろば型）子育て支援施設」は、運営母体や施設の規模によりタイプは様々であり、開室の日数も週に3～4日・週5日・週6～7日等、施設ごとの違いがある。開室の時間は1日に5時間以上となっており、常駐する支援者が数名いて、来場する親子のサポートを行う形式をとっているとされる。本論では、親子が分離して行われる形態である幼児教育施設における保育等の子育て支援ではなく、親子と支援者がともに行う支援のあり方を検討するため、「一般型（ひろば型）」あるいは自治体等の補助は受けていないが運営形態や運営内容としてはそれに類する、子育て支援に関するひろば（ここでは自治体等の補助を受けて運営されている「ひろば型」施設と区別して、「子育てスペース」と表記）を対象として考察を行いたい。

1. (2) 一般型（ひろば型）子育て支援施設の機能分類

一般型（ひろば型）の子育て支援施設における支援においては、「地域のなかに親子が気軽に集まる場所があること、ほっとした雰囲気の中かで子育ての仲間をみつけ、気軽に子育ての相談ができること」が期待され、それが「育児中の母親にとって大きなサポートとなる」とされている¹⁴。

大豆生田（2006：2007）によると¹⁵、一般型（ひろば型）子育て支援施設の機能としては、「居場

所機能」、「相談・助言機能」、「イベント交流機能」、「学習機能」の4つの側面が示されている。1点目の「居場所機能」とは、親子が安心感を持って過ごす時間や空間としての機能や、親子がその場でそれぞれの参加の仕方ですべて主体的に関わる場としての機能とされる。2点目の「相談・助言機能」とは、育児相談を専門のスタッフが対応することや、広場スタッフが子育ての当事者として相談に乗ること、また母親同士のおしゃべりもピアカウンセリング的な機能を持つものとして位置付けられている。3点目の「イベント交流機能」とは、地域の親子が交流することや多様な世代間の交流、学生と子どもの交流等が行われることを指す。4点目の「学習機能」とは、子育ての講演会や他の親との座談会等、子育てに関わる学びを得る機能として位置付けられている。

また、塚崎ら（2007）¹⁶は広場の機能として、「子どもの遊び場」「ほかの母親との交流の場」「情報や知識を得る場」「息抜きやりフレッシュの場」「親子関係を見直す場」「相談する場」「自分の力を発揮する場」の7つの分類を用いている。また、この分類のどの項目が利用者自身に機能として認識されているかという、利用者への塚崎ら（2007）の調査によると、「子どもの遊び場」「情報や知識を得る場」「息抜きやりフレッシュの場」「親子関係を見直す場」「ほかの母親との交流の場」「相談する場」「自分の力を発揮する場」の順であるとされる。

櫃田（2008）¹⁷においては、「居場所機能」「多世代の人々の相互交流の場」「子どもと親の遊びの場」「学びと成長の場」「相談・援助の場」「情報交流の場」「人材・ボランティアの育成の場」の7つの側面から分類される。1点目の「居場所機能」とは、「家族と一緒に居るような安全感・安心感」を感じられる場であることとして位置付けられている。また、その居場所は、「自分らしく、自分で居られる場」でもあり、「親だけの時間」等の「自分の場を保障する」ものでもあるとされる。そして、その親子だけでなく、「仲間を感じて居られる場」でもある、と「居場所」の機能が多方向から位置づけられている。2点目の「多世代の人々の相互交流の場」機能としては、保護者とは年代の異なる支援者や、ボランティア、学生等との触れ合いが行われる場である点が挙げられている。3点目、「子どもと親の遊びの場」機能とは、保護者が、「さまざまな月齢の子どもたちの遊びや支援者の対応に触れ、子どもの個性を発見したり、発達への理解を深めること」や、子どもが「親以外の世界を広げていくこと」によって社会性を育むということを指す。4点目、「学びと成長の場」機能としては、同年代の他の親子連れや、年代の異なる支援者等の姿から、子どもとの関わり方を学習したり、「一個人」としても「仕事復帰への見通し」が持てること等、保護者が自己の能力を高めていく場所としての機能を示している。5点目「相談・援助の場」機能は、「親が子育ての中で抱える悩み」を、「親同士の自由なおしゃべり」やスタッフやサポーター達との雑談や相談を通して、「深刻化させないで解決できるよう援助する予防的な役割」の側面を指している。6点目、「情報交換の場」機能では、「親自身の力をつけるような情報提供」という観点のもと、他施設や諸制度の情報を集約して示すこと（情報の一本化）や、ひろばスタッフが子育てに関わる情報を幅広く収集すること（ストック）、正しい情報の提供（フィルタリング）、情報のわかりやすい提示（分類）、親自身による情報選択・決定の重視（情報の出し方）、情報の発信としての出版活動等（親参

画で広報活動）等が要点として挙げられている。7点目、「人材・ボランティアの育成の場」は、利用する親子だけでなく、支援スタッフや活動をサポートするボランティアの質の高い実践を可能にするための育成の場としての機能を指している。

以上それぞれの機能分類とも、重なる部分は多く、概ね同様の機能分類であると思われる部分も持つが、大豆生田の分類が、保護者による場の活用の視点からの機能を重点的に捉えたものであるのに対して、塚崎らの機能分類においては、「子どもの遊び場」機能や「子どもと親の遊びの場」機能等、子どもがどのように過ごすかという子ども視点からの機能が追加されている点に違いが見られる。また、この項目が、利用者にとっての機能として最も認識されている項目として挙げられていることも塚崎らの調査よりわかる。さらに、櫃田の分類においては、親子の利用という視点のみに限定せずに、支援スタッフやボランティアが育つ場としての機能にも着目する等、一般型（ひろば型）の子育て支援施設の機能の多様性が示されている。

では、これら様々な機能における、一般型（ひろば型）子育て支援施設での、子ども・保護者・支援者の関係性、特にそれぞれの主体的なあり方はどのように位置づくものであるだろうか。

1. (3) 一般型（ひろば型）子育て支援の機能分類から見る子ども・保護者・支援者の関係性

大豆生田の機能分類である①「居場所機能」、②「相談・助言機能」、③「イベント交流機能」、④「学習機能」においては、保護者が居場所を獲得し、相談や助言を得たり、ある時は保護者同士で助言を与え合ったりし、多様な世代と触れ合い、子育てに役立つ知識を得る、というような、主体的に子育てに関わる「保護者」像が読み取れる。また、そのようなことが可能であるための、施設や施設スタッフ側による、環境設定や、相談援助、イベントや学習等の機会の設定等が充実して行われることが同時に機能の中に埋め込まれていることが読み取れる。その点で、支援者の主体性は、施設の機能の促進に向けられるものとして発揮され、それらの支援者によりエンパワメントされる形で保護者が主体的にこれらの施設を活用していくことが想定されていると考えられるだろう。

また、塚崎らの機能分類である、「子どもの遊び場」「ほかの母親との交流の場」「情報や知識を得る場」「息抜きやりフレッシュの場」「親子関係を見直す場」「相談する場」「自分の力を発揮する場」においては、上記のような「保護者」の主体性に加えて、「子どもの遊び場」や「親子関係の見直し」という機能の中では、子ども側が環境や保護者等と関わっていく主体的なあり方が想定されていることがわかる。

櫃田の機能分類においては、保護者・子どもの主体性に加えて、支援スタッフも支援の場を通して学び、育成されていくという機能に着目するものであり、支援スタッフの学習主体としての主体性も同時に機能分類の中に位置付けられている。

以上3種の機能分類内での、子ども・保護者・支援者の位置づけを概観したが、どれも一般型（ひろば型）子育て支援施設においては、積極的に子育てに関わる保護者の主体性、保護者の主体性を尊重しながら、その主体性をさらにエンパワメントしていく支援者の主体性、そして「遊び」や「他

児との関わり」における子ども自身の主体性が想定されていることがわかった。

以後、これらの機能分類を持つ、一般型（ひろば型）子育て支援施設等における各主体のあり方に加えて、「子どもに直接関わる場面での支援者の主体性」、及び「居場所」としての子育て支援施設で過ごす保護者の主体性、一般型（ひろば型）子育て支援施設における遊び場面での子どもの主体性に関する具体的な姿等について、より詳細に考察していきたい。考察の手がかりとして、筆者も支援スタッフとして関わる、子育て支援スペースにおける支援スタッフへのインタビュー調査及び、支援施設での支援状況の観察記録をもとに、子ども・保護者・支援者３者の関係性とそれぞれの主体性をめぐるスタッフの意識の変容および葛藤について取り上げていく。

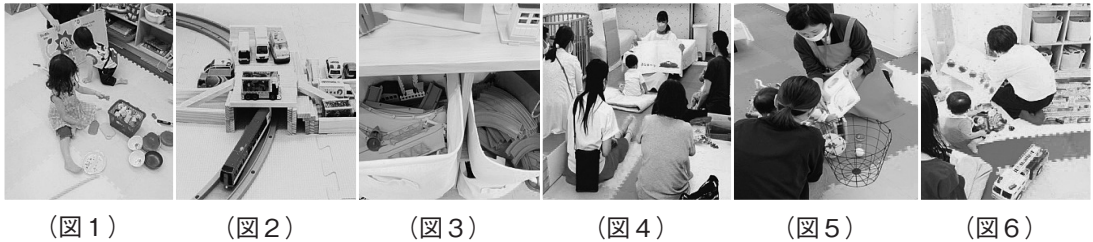
２．支援スタッフインタビュー調査から考える、子ども・保護者・支援者のあり方

２．（１）子育て支援スペースＡの開室の経緯及び現況

今回対象とする施設は、2014年、自治体の「商店街課題解決プラン事業コンテスト」に、近隣に所在する保育者養成に関わる学校法人が応募し採択されたプランとして、商店街の空き店舗の活用を兼ねて開所されたものである。１年間の資金補助のある期間を経て後、現在は学校法人の運営により引き継がれ、継続して商店街内の空き店舗を活用した「子育て支援スペース」型の子育て支援の場として機能している（運営に関する自治体からの補助等の点で「ひろば型」等の地域子育て支援拠点事業としては位置付けられていないが、運営手法や運営内容においてはほぼ同様の取り組みであると言える。また、この子育て支援スペースの名称を以降「子育てスペースＡ」とする）。

子育てスペースＡの基本的な運営状況は、平日に３日間、各１０時～１６時までの開所時間となっており、各日ともスタッフ２名が支援にあたり、登録された支援スタッフの総数は８名である。支援スタッフの内訳としては、保育士資格を持つ支援スタッフが２名、教員免許を持ち子育て支援ボランティア経験者である支援スタッフが１名、その他の支援スタッフは、保育や子育て支援に関わる経験を持たないが、全員が子育て経験者という構成となっている。部屋の面積が空き店舗のワンルームであること、及び、現在はコロナウイルス感染予防の対策もあり、利用者が親子６組程度を超えたら入室制限をかけて運営しているため、１日平均８～１２組程度の親子連れが利用する。新規利用者の申込書に記載されている居住地データからわかる傾向として、利用者の約８割は子育てスペースＡのある区内に居住している、近隣の親子となっている。その他地域の利用者としては、商店街に買い物に来ることを兼ねて来られていた、電車で２０分程度までの他地域からの利用者や、帰省・里帰り出産時における利用等が見られる。利用者の属性は、ほぼ母親に偏っており、稀に父親や、両親連れ、祖母による利用等も見られる。

現在支援スペースＡに設置している玩具等は、初めて来た子どもや、月齢の低い子どもが遊びやすい、一人で遊ぶ完結型の玩具及び知育玩具に加えて、子ども同士が関わって遊ぶことや、保護者や支援スタッフと子どもの間でやり取りが生じやすいこと等の視点でスタッフにより選ばれた、



「おもちゃと玩具」「人形類」「カプラ・積み木」「レールと電車・車」「ボール」「楽器おもちゃ」「お絵かき」「絵本」等となっている（図 1～3）。また、月に 2 度程度の「読み聞かせ」の会（図 4）以外に、日常的な支援の中でも支援者が子どもに個別に絵本を読んで遊ぶことも頻繁に見られる（図 5）。また、保護者自身も読み聞かせ用の大きなサイズの絵本を手に取り利用できるようになっている（図 6）他、スペース A にある絵本は利用者への貸し出しも行われている。

2. (2) 子育てスペース A の支援スタッフの意識変化の過程

子育てスペース A の開所時の目的が、商店街の活性化及び保育者養成機関の学生の学習の場の確保を念頭に置いたものであったこともあり、不定期に開催されていた学生主体のイベント等以外の際は、子連れの買い物客が立ち寄れる休憩スペースとしての機能が主であった。スペース A には、玩具やソファ、授乳スペース、オムツ交換スペース等が配置されており、来場者が子どもと遊んだり休憩したりする場所として開始され、開始時の支援スタッフの主な業務内容は、来場者の受付業務、スペースの利用規約の説明や安全管理、おもちゃ等の整理、状況によって子どもや保護者との会話や相談対応等であった。

開室から 8 年が過ぎた現在、利用者親子の様子や、支援スタッフ間の意見交換を元に、支援スタッフの業務内容や、配置する玩具の内容等、支援開始時とは変化のあった点が見られる。まず、支援スタッフの業務内容としては、子どもとより直接関わって遊ぶことと、保護者同士のつながりの形成に繋がる積極的な働きかけ等、支援スタッフがより能動的に働きかける場面が多く見られるようになった。また、配置する玩具の内容は、子どもがひとりで、あるいは一組の親子で完結して楽しめるタイプの玩具中心であったものから、場を広く使って何組かの子どもで楽しむことができる玩具や、保護者や支援スタッフと子どもの「やり取り」が引き出されるタイプの玩具の追加、また、読み聞かせ用の大型の絵本を保護者も利用できるように設置する等の変更があった。このような変更は、運営主体からのトップダウンでの方針転換として行われたのではなく、各支援スタッフによる、数年間の支援経験からの気づきやジレンマ等がボトムアップ的に共有され、段階的に具現化していったものであると考えられる。

支援スタッフの中で、支援開始時のような、部屋の整備等による快適な場所の提供等、より裏方的な関わり方であったものが、現在、より積極的に子どもや保護者に関わっていく形を取るように

支援内容や支援のスタイルが変更された過程は、明文化する形で時期を区切って明確に転換したものではなく、支援スタッフのミーティング時での共有や、それ以降の支援実践の場の中で徐々に変わっていったという経緯があるため、今回改めてその変化について筆者から質問をし、支援スタッフに回答してもらうという形での支援者の意識の言語化を行った。

まず、開始時から支援に関わる支援スタッフBへのインタビュー調査を取り上げたい。

【支援スタッフBへのインタビュー】

筆者：8年経ちましたが、ここ（支援スペースA）での支援について、どう思いますか？

スタッフB：最初の頃は、子ども連れでちょっと避難？じゃないけど、家以外でちょっと寄れる場所が提供できたら、それが子育て支援かな、と思っていたかな。

筆者：それは違った？

スタッフB：それも良いんだけど、やっぱりちょっと、お母さんが子どもと過ごすのに疲れちゃったのか、スペースAに来てあんまり子どもと遊んでないとか、スマホ触ってて、本当に自分の家みたいに過ごしている姿とかを見ることが増えたあたりから、あれ？なんか、居場所だけ提供するのでいいのかな？って、ちょっと違和感というか。

筆者：違和感。それは保護者にどんなふうに過ごしてほしいということですか？

スタッフB：何かしてほしい、ということではないけども。子どもがせっかく気になるおもちゃを見つけて遊び出して楽しんでもるところとか、何か聞いてきたり喋ったりしてるところを、もう少し関心を持ってあげてほしいな、という気持ちが出てきた。

スタッフBへの上記のインタビューは、スペースA開室当時の、親子の居場所提供という機能に重点化した支援を行っていた支援者達による、支援のあり方への疑問の表出として捉えることができる。また、同じく開室時より関わる支援スタッフCにも同様のインタビュー調査を行った。

【支援スタッフCへのインタビュー】

筆者：開室当時の支援の状況について何か思うことはありますか？

スタッフC：特に問題とかはなかったと思うけど、「遊んでもらい！」って言って、お母さんが子どもをスタッフのところに連れてきて、お母さん同士で話したりとかも結構あったかな。別にこちらは子どもと一緒に遊ぶ気で準備しているからそれはもちろん良いのだけど。なんか「ほんとにこれであって？」というのはあった。

筆者：「あっていない」という感じ？

スタッフC：あっていないわけではないけども。お母さんたちのお喋りも大事だし。せっかくなら寛いでほしいなとも思うし。その時間を作るためにスタッフが子どもと遊ぶのは全然良いけど、お母さんたちが過ごすのに「邪魔だから」スタッフと遊んでおいで、ということじゃ

なくて。もっと前向きというか。スタッフと子どもが楽しく遊んでるから、それを安心して見ながらお母さんたちも息抜きしたり、お喋り出来たりする、みたいな。順番として、まず子どもが楽しく遊べる、ということをスタッフも保護者も願って、それをスタッフが助けて、それを見ながら保護者も休憩してほしいな、と。

支援スタッフCのコメントからも、保護者が支援スペースで見せる子どもやスタッフへの姿に対する支援のあり方について、疑問を感じ始めたことがうかがえる。インタビュー調査により言語化された、支援スタッフが開室当時に感じた「違和感」は、スタッフ間の会話やミーティングの場面でも表現を変えて何度も出ており、最終的には「このスペースは子どもにとっての良い場所になっているか?」という問い及び「子どもと保護者に支援スタッフはどこまで関わるか?」という問いの形で、支援スタッフ間の課題として認識されてきた。

2. (3) 「居場所」としての子育て支援スペースの機能における「家」イメージの「ずれ」から保護者の主体性を考える

インタビュー調査において、スタッフの「違和感」として立ち現れたものは、居場所提供型の支援スペースのあり方における、「居場所」の意味付けの不確かさによるものであるとも考えられる。まず、子育て世帯にとっての「居場所」として一般的に想像される場所とは、子どもが泣いても気にせず過ごせるような場所であったり、授乳やオムツ替えができる場所であったり、子どもが安全に楽しめる玩具等があり保護者が安心して見ていられる場所であったり、または同じような境遇にある子育て中の親子に出会える場所であったりするだろう。これらの場は、どれも子育てにおいて必要な場所であると言えるし、子育て経験者であるスタッフ達自身にとっても、その必要性を共感できる場所である。しかし、スタッフBが「違和感」として捉えたような、保護者が「スマホ触って、本当に自分の家みたいに過ごしている姿」は、「居場所」のあり方として受容されにくいものと捉えられていることがわかる。

ひろば型等の子育て支援施設における「居場所」機能において、そのあり方を「家」や「家庭」「第二の家」等に結びつくイメージで表象する言説はしばしば見られる。たとえば、櫃田 (2008)¹⁸は、子育てひろばは、「我が家のように自由でほっとできる」(傍点筆者) 場であることの必要性を指摘する。しかし、支援スタッフが感じた「違和感」もまた、「保護者がまるで自分の家のように過ごしている」という点にあったことと、「ひろば型」の子育て支援の目的が第二の「家」となることは、矛盾するように思われる。これは、両者において「家」というメタファーに内包させているイメージの違いによると考えられる。

一方は、くつろいでリラックスし育児の精神的負担感が減らせることや、打ち解けやすい雰囲気の中で保護者同士のつながりを作ること、家の中で家族と育児を分担するように支援スタッフと子どもとの関わりを分かち合うこと等に主体的に関わっていく保護者の姿が「家」イメージと結び付

けられているだろう。そこでは、保護者が子育てをよりスムーズに進めていくための、「他者にかかれた」温かい場所として「家」イメージが用いられている。

他方、スタッフが違和感を感じた「家のように」とする時の「家」は、保護者としての役割を「降り」て、一個人として振る舞うことや、自分以外の存在と関わらないことを可能にする「閉じた」家イメージであるだろう。それは、家族や子どもと心理的にも物理的にも距離を保って過ごすことができる「個室」としての家であり、また地域社会から玄関ドアという境界線により区切ることで立ち上がってくる「家」である。つまり、「他者から距離を確保し、一個人として振る舞うことを許容する場所」としての「家」のイメージが結びついているという違いがあると考えられる。

「居場所型」の支援スペースが、保護者自身にとっての「個々の家」イメージとして捉えられる際には、保護者である自分を「降りて」くつろぐ=子どもとのやりとりや子ども自身の遊び等に関心が薄れる等、支援者側と利用者側の「居場所」=「家」イメージのずれが生じることが考えられる。この「家」イメージにおいては、保護者が子どもと関わって遊ぶことや、他の利用者・支援スタッフ等の他者と言葉を交わしたり、共に行動したりすること等の、保護者による主体的な行動は生じにくく、自分自身の休憩の場としてのみ位置づく。そして、この子育て支援施設における「家」機能のイメージの「ずれ」が支援スタッフBの感じた支援における「違和感」であったとも言えるだろう。

しかし、支援スタッフがこのような違和感を感じたということを、支援施設の場においてくつろぐ保護者の子育てに対する消極性を問題視する、いわゆる子育ての責任を保護者による「私事」として回収する立場に連なる非難と必ずしも同義として見ることはできない。なぜならば、それらの保護者の姿に「違和感」を感じると同時に、施設としては、子育ての大変さを軽減できるような、保護者にとってより「くつろぎ感」のある場所にしたいという願いも語られること等から、単に子育てを保護者の「私事」として位置付けるのではない支援のあり方を模索する、子育て支援スペースにおける支援スタッフ達の葛藤が見出せる。このような葛藤場面を経て、支援スタッフのミーティングにおいては、保護者には安心して寛いでほしい一方で、寛ぎながらも子どもの話を聞いたり、子どもが遊ぶ姿に関心を持ったりして、子どもが楽しい、嬉しいと感じるような関わり方をしてほしいという、2つの願いを同時に満たす可能性が探られることとなった。

そのひとつの方策として出された視点が、支援スタッフが積極的に子どもとの遊びに関わっていくことで、子どもの遊びの姿をより積極的にサポートし、それを通して保護者自身が子どもの言葉や姿により関心を持つきっかけを作りたい、また、保護者に対しても「寛ぎ」の中にも、他の親子や支援スタッフという他者の存在に関心を持ってもらうような関わりを積極的に行っていきたいというものであった。これは、「黒子」ではなく主体的に関わっていく支援者のあり方の提起であり、休憩スペース的な機能の側面が強かった初期の子育てスペースAの支援のあり方の転換点ともなる意識の変化へとつながる葛藤であったと言える。

では、保護者に寛いでほしいと願うことと、保護者にもっと主体的に子どもに関わってもらいたいと願うこと、また、保護者にもっと主体的に子どもに関わってほしいと願うことと、支援者がもっ

と積極的に子どもや保護者と関わっていききたいという願いとが、どのように共存し得るのか、その可能性を以下で考えていきたい。

3. これからの子育て支援における、子ども・保護者・支援者のあり方の再考

3. (1) 子育て支援スペースAにおける、支援スタイル変化後の参与観察から

支援者が子どもや保護者にもっと積極的に関わっていくという意識は、支援のあり方として、具体的にはどのような変化を引き起こし得たのか。また支援者の支援スタイルを変えることにより、子どもや保護者の姿としてはどのような場面が見られたのかについて、以下では、筆者が支援スタッフとともに支援の場において参与観察を行った際の記録及び、支援後の支援スタッフへの聞き取り調査をもとに考察していく。

〈子どもとの遊び場面における支援スタッフの支援内容〉

- ・ 来場時の子どもとのファーストコンタクトを大事にし、スペースで遊び始める際の、遊びへの誘い役を積極的に行うこと
- ・ 子どもに声をかけながら遊び、子どもと対話する場面を持つこと
- ・ 個々の子どもの関心や欲求に従って、絵本の読み聞かせも場面に応じて行うこと
- ・ 子どもの遊びをさらに展開できる玩具や素材を追加したり子ども自身に見せて選べるようにしたりしながら遊びに参加したり見守ったりすること
- ・ 子どもが他の子どもと関わりながら遊べるような橋渡しをすること
- ・ 自宅で経験したことがない、と保護者が述べるような遊びや経験にも子どもが関心を持ちそうならば一緒に取り組んでみることで、新たな子どもの姿を可視化するよう努めること

〈保護者に関して行う支援スタッフの支援内容〉

- ・ 子どもが遊びの中でできていること、興味を持っていること等、子どもの「良さ」について、保護者との会話の中で積極的に伝えていくこと
- ・ 子どもと他の子どもとが関わって遊ぶ場を通して保護者同士が関わり合う状況を作っていくこと
- ・ 家庭で子どもがどのような遊びや過ごし方をするのが好きか等、家庭での様子を話題にし、保護者の不安や悩み等が表出した場合は、それについて会話しながら、関連する遊び等を実際に子どもと遊ぶ中で経験する等し、不安感の軽減に努めること
- ・ 保護者も絵本を利用して良いこと（特に大型絵本等）を伝えること
- ・ 話題に応じて、他の保護者にも聞いてみる等し、保護者間の会話を繋いでいくこと
- ・ 保護者との会話の中で、子どもの話題以外の会話も積極的に行っていくこと

子どもに対する支援スタッフによるこれらの支援のスタンスの変更は、スペースAで過ごす子どもどの様な姿を引き出しうるのか、支援スペースAにおける筆者による参与観察時の2例の親子と支援スタッフの関わりの様子を、観察記録を元に考察していく。

【ケース①（新規利用の親子 子ども：2歳半男児、保護者：母）】

〈子どもと支援スタッフの姿〉

〈保護者の姿〉

支援スタッフは親子の入室時に合わせ、玩具のいくつかを持って子どもの側に寄り、興味があるものがあるか聞いたり様子を見たりする。他にも見てみたいか声をかけて、スペース内の玩具を一緒に見て回る。	利用規約の書類等に記入、荷物の始末等しながら、スタッフと子どもが関わる姿を見ている。
支援スタッフが最初に提示した玩具以外の玩具に関心を示し座って遊び始める。支援スタッフは物を手渡したり、会話したりする等、その玩具で遊ぶ子どもの隣で見守りながら、保護者に玩具の利用方法等について話す。	子どもが選んだ玩具について、「それにする？」「できるかな？」等声をかけながら、子どもとスタッフの近くに座る。 子どもが支援スタッフと会話するのを聞いている。保護者に話しかけた支援スタッフに相槌を打つ等が見られる。
子どもが玩具に別の玩具を組み合わせて遊び始める。支援スタッフは、「それ面白いね」等、子どもの遊びについて声をかけながら、ものやり取り等を続ける。支援スタッフは保護者に、「上手に使えますね」や「いろんな工夫をしていますね」等、子どもの遊びの中で感じられた「良さ」を保護者に伝える。	子どもの様子を見ながら、室内の様子や、室内に提示している情報等に目をやる。他の親子連れについても声はかけないが、見ている。支援スタッフから子どもについて「上手に使えますね」「いろんな工夫をしていますね」等の声をかけられ、子どもの様子を見て、「ほんとですか？」「こんなことするんや」等、子どもについて支援スタッフと会話する。またその会話の中で、「家だと、玩具片付けないから、あんまり出してなくて。ちょっと家でもこういう玩具で遊んだ方が良いんですかね？」と支援スタッフに質問・相談をする。支援スタッフは、「〇〇君、こういう玩具好きみたいです。うちでも遊べるなら喜びそうですね。お片付けは、この玩具の箱にしまうのはまだ難しいと思うから、大きい箱に入れるだけにすると、一緒にやって見せたらできるんじゃないかな？」等答える。保護者は、「家でもやってみようかな」等と答える。

<p>近い場所で別の遊びをしていた他の子どもの出していたおもまごとの玩具にも関心が移った様子を見せる。子どもに対して、支援スタッフが、「一緒にやろうって言うてみる?」「これ貸して、言うてみる?」等と聞く。子どもが頷いたため、子どもの横で、支援スタッフが横で遊んでいる別の子どもに、「これ、〇〇君も一緒にやってみても良い?」「このアイスクリームだけ買っても良いですか?」等、声をかけ、そこから、隣にいた別の子どもと支援スタッフが見ていた子どもが同じエリアで、部分的に関わりながら遊び始める。支援スタッフは、初めは両方の子どもと関わって一緒にやり取りをしながら遊んでいる。</p>	<p>他の親子連れが近くで遊び始めたため、場所を移動する等して、スペースを空け、子どもを見ている。子どもが支援スタッフと遊びを続けているため、ソファーに移動し、スマートフォンで子どもの様子を写真に撮る等して過ごしている。</p> <p>支援スタッフが、子どもが他の子どもの玩具に関心を移したことについて子どもと会話しているのを聞き、「いいよ、それ他の子が遊んでいるよ」「後でにしょ」等子どもに声をかける。支援スタッフが他の子どもとも一緒に遊び出したのを見て、座る場所を移動し、一緒に遊んでいる子どもの保護者の近くに座り直し、「すみません」「何歳ですか?」等、保護者同士で会話が始まる。</p>
<p>支援スタッフは、おもまごと遊びに入り、2人の子どもを媒介する「〇〇をください」や「〇〇君もお弁当が欲しいみたいです」等の会話をしながら、子ども同士のままと遊びをサポートする。それを見て両保護者が同様に子どもたちに、声かけをし出すのを見て、子どもとの遊びから一旦離れる。その後、2人の保護者達と遊びが継続する。</p>	<p>2人の子どもが、支援スタッフに玩具を手渡して食べる真似をする等、関わって遊び始めたため、その間に保護者同士で会話が始まる。どの辺りに住んでいるのか、この子育てスペースにはよく来るのか、他にはどんな場所で遊んでいるのか等の情報交換を行っている。子どもたちが保護者達に物を渡したりやり取りを行ったりし始めたため、2人の保護者が子ども達と遊び始める。</p>

【ケース②（5回以上利用の親子 子ども：0歳男児、保護者：母）】

〈子どもと支援スタッフの姿〉

〈保護者の姿〉

<p>入室時に、いつもその子どもが遊んでいる玩具と、もう一点別の玩具を用意して、子どもに見せて近くに置く。子どもが新しい方の玩具に手を伸ばして様子を見ている際に、支援スタッフが動かして見せて、「コロコロ転がってるね」「コロコロ～」等声をかけながら、興味があるか見守っている。</p>	<p>荷物の始末等済まし、いつも子どもが遊ぶ玩具を子どもの近くに置き、子どもの近くに座る。</p>
---	---

子どもが新しい玩具に手を伸ばして触りながら支援スタッフの顔を見る。支援スタッフが、「もう一回やろうか」「ほら、コロコロコロ～」と声をかけながら玩具を動かすと、声を立てて笑う。	子どもが声を立てて笑ったことに気づき、「これ好きなんや」「面白いね～」と言いながら、保護者自身が玩具を動かして見せたり、子どもの手にとってその動きをさせたり等して関わっている。
支援スタッフが記憶している、以前に利用時の状態より発達の過程が進み、子どものお座りが安定していることを見て、「お座り上手になったね」「お座りできるから遠くまで見えるね」等声をかけながら、さらに別の玩具を持ってきて、使って見せる。 子どもは関心を持って、手で触ったり、口に入れたりしている。	支援スタッフが、「お座り上手になったね」と子どもに声をかけた会話に、「そうですね～」「確かに最近後ろに倒れなくなりました」と、子どもの発達の変化を話題に会話が始まる。また、「ここからハイハイって、どう進むんですかね？」等、支援スタッフに聞く姿が見られる。支援スタッフが「お座りが安定してきて、腰とか背中とか、手足の力がだんだん付いてくるから、もう少ししたら、ずり這いとかして、移動が楽しいって時期になりそうですね」等と答えている。それに対して、「ちょっと楽しみ。でも家の床を整えなきゃ」等、答えている。
子どもが使っていた玩具に関心を持った他の子どもが近くにくる。支援スタッフが、その子どもにも声をかけ、2人が同じ場所で同じ玩具を触って遊ぶ。	玩具に触りにきた子どもの保護者から、「何ヶ月ですか？」等声をかけられ、月齢や、お座りが上手になったこと、ハイハイがまだであること等、発達について会話している。

3. (2) 支援者が主体的であることによる、子ども・保護者の主体のあり方について考える

以上の、スペースAにおける、子ども・保護者・支援スタッフの関わりの場面より、支援者がより積極的に子ども・保護者に関わる意識を持つことにより、子どもや保護者、そして支援者自身には次のような姿が見られた。

【子どもに見られた姿】

- ・支援スタッフによる、玩具の紹介や複数の玩具の提供を通して、子どもが場所の雰囲気や使い方を理解し、遊びたい気持ちを持ち、遊びたい玩具をいくつかの中から選択する等、場所や玩具等の環境に対して主体的に関わる姿
- ・入室時からしばらくの間、支援スタッフが近くに寄り添って、声をかけながら共に玩具等で遊ぶことを通して、保護者以外の人に慣れて遊んだり、言葉を交わしたり聞いたりする姿
- ・支援スタッフが他の子どもに声をかける等の媒介役をすることを通して、部分的にでも他の子どもと関わりながら遊ぶ姿

【保護者に見られた姿】

- ・入室時の荷物の準備等の場面で、支援スタッフが子どもと遊び始めていることを見ることで、ゆっくりと室内の様子を見たり、持ち帰り用に置いている情報誌に目をやったりする姿
- ・子どもが様々な玩具等で遊ぶ姿を見ることにより、支援スタッフと、子どもに対する新たな発見につながるような会話をする姿
- ・子どもと遊ぶ支援スタッフから、子どもについてその「良さ」を指摘されることをきっかけに、支援スタッフと会話をする姿
- ・支援スタッフによる他の子どもと関わる遊びへの媒介を通して、一緒に遊ぶ子どもの保護者と会話をする姿
- ・支援スタッフや他の保護者と会話する状況が整っていく中で、発達上の不安や疑問、子どもとの遊び方の疑問等の日常的な不安要素や相談内容について、語る姿

【支援者に見られた姿】

- ・子どもに対してまずどのような玩具や遊びを提示するかを判断する姿
- ・遊びの中で、ものの名前や色、大きさ、様子を表す擬音語等について積極的に取り入れながら会話をする姿
- ・子どもと遊ぶ中でその子どもが見せる良い特徴をスタッフ自身の視点で捉えて言語化する姿
- ・他の子どもとの遊びを媒介するための会話の橋渡しをする姿
- ・二人以上の子どもが遊びを安定させられるようになるまでの両者の思いを代弁するような会話を行う姿
- ・保護者から相談等を受けた際に、子どもの「良さ」をベースにして、自身の言葉を選択して回答をする姿

以上、これらスペースAでのケースをもとに、一般型（ひろば型）子育て支援施設での支援のあり方を考えてみると、子どもや保護者への関わりにおいて主体的である支援スタッフの支援のスタイルは、その場で過ごす子どもの主体性を育む可能性及び、保護者の寛ぎと子育てへの積極的な参加や他の保護者との関係作りとを両立させる可能性とにつながる支援のあり方のひとつの姿であると言えるのではないだろうか。

4. まとめ

本論文では、「一般型（ひろば型）」子育て支援施設における支援者の主体的な支援のあり方について、事例を元に考察を行った。特に、幼稚園や保育所等の幼児教育施設における支援とは異なり、親子が同席の形態で行われるこれらの支援においては、支援者の支援内容に関する法的な位置付け

の弱さや、支援者が「黒子」として機能する事をよしとする背景等があり、子どもや保護者に対する支援者のあり方については更なる考察が必要であることを指摘した。その上で、筆者が支援者としても関わる支援スペースでの事例を元に、より主体的に子どもに関わっていく支援者のあり方及び、その様に関わるにより見出すことのできた、子ども自身の主体的な姿や保護者が子どもに関心を高めたり、子どもとの遊び方の幅を拡げたり、保護者同士で関わろうとする等の主体的な姿から、支援者の主体的な関わり方の重要性を指摘した。

幼稚園や保育所等に通う前の（あるいは通わないという選択肢も含めて）保護者が、子どもと1対1で向き合い続ける負担感を軽減することと、親と子どもが共に過ごせるという選択肢とを両立する可能性として、親子が同席して過ごす「一般型（ひろば型）」のような子育て支援施設の意義は大きいだろう。特にその場において、保護者以外の支援者もまた、保護者と共により積極的に子どもの保育に関わる様な支援のあり方は、保護者の居場所提供や相談援助等、対保護者に重点化した機能以上に、子どもや保護者の主体的な姿を引き出す可能性を論じてきた。子どもを幼児教育施設に預けるという方法以外にも、保護者と支援者が共に子育てをしていく、共に主体的に子どもに関わっていくという、より子どもに対する保育機能を強化した「一般型（ひろば型）」のようなスタイルの子育て支援の場の充実もまた、「無園児」支援には大きな役割を果たすだろう。

また支援者のあり方が、「黒子」から、より主体的に判断し、子どもや保護者に関わっていく存在となることにより、様々な子育て支援において支援者が直面する、「子育ての社会化」と「子育て私事論」との狭間における葛藤の解消につながり得ること、また保護者と共に主体的に子育てに関わるという、言わば保護者と横並びの立ち位置から共に子どもと関わっていくと言えるような、新たな「支援」のあり方の可能性を見出すことができた。

なお、子育て支援施設における支援者が、主体的に支援に関わるための支援スキル等の向上の手法の開発及び、支援の質に応じた報酬体系の整備等の制度的な位置付けのあり方に関しても課題が残される。これらについてはさらに別稿での考察を行っていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、インタビュー調査及び支援場面の観察にご協力頂きました支援スタッフの方々及び施設利用者の方々に心より感謝申し上げます。

注記

¹ 法制度における文言としては、次世代育成支援対策推進法（平成15年）の基本理念では、「次世代育成支援対策は、父母その他の保護者が子育てについての第一義的責任を有する」ことが、教育基本法（平成18年）「家庭教育」に関する条文（第10条）においては、「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有する」ことが規定されている。また、社会による子育て支援の充実と同時に、子育てを私事と位置付ける社会状況について松木洋人、2013、『子育て支援の社会学』新泉社。p36-37においては、「子育て私

事論とそれからの転換を主張する議論，支援の論理と抑制の論理とが併存している」こと，またそれにより「家族と子育てをめぐって，相反する規範的論理の二重化とも言える状況が生じている」ことが指摘されている。

- ² 東野充成，2008，『子ども観の社会学－子どもにまつわる法の立法過程分析』大学教育出版，p52-53において，少子化対策基本法のような子育てに関する支援法のあり方を取り上げ，「子育ての第一義的主体を親に，それをバックアップするものとして社会を措置するという構図」により，子育ての「家族への囲い込みと社会化」という「二項対立図式」が維持されていることが指摘されている。
- ³ 無藤隆・安藤智子編，2008，『子育て支援の心理学－家庭・園・地域で育てる』有斐閣，p9においては，「子育て支援において特に重要なのが親の状態の改善である」とされ，「それが子育てに深刻な影響を与え，さらに子どもの成長に問題が生じる可能性が高い」ことが指摘されている。
- ⁴ 保育に従事する要件として，国家資格である保育士や，幼稚園教諭免許があるのに対し，子育て支援施設における支援者の要件としては，厚生労働省ホームページ，「地域子育て支援拠点事業」，https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate_sien.pdf（2022/11/17参照），の規定において「子育て支援に関して意欲があり，子育てに関する知識・経験を有する者」とされる等，従事者に求められる資格要件には国家資格である保育士や幼稚園教諭とは異なる位置づけとされている。
- ⁵ 認定NPO法人フローレンス，「無園児家庭の孤独感と定期保育ニーズに関する全国調査」，https://florence.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/06/0615_report.pdf（2022/11/17参照）。
- ⁶ 文部科学省，「幼児教育の実践の質向上に関する検討会（第8回）参考資料6」，https://www.mext.go.jp/content/20200305-mxt_youji-000005395_08.pdf（2022/11/10参照）。ただし，ここではインターナショナルスクール等への所属児の数は反映されていない。
- ⁷ 朝日新聞デジタル，「子ども家庭庁の概算要求4・7兆円 『無園児』への支援充実へ」，<https://www.asahi.com/articles/ASQ8Z61B2Q8ZUTFL010.html>（2022/11/17参照）。
- ⁸ 上野千鶴子，2011，『ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ』太田出版，p58
- ⁹ 松木洋人，2013，『子育て支援の社会学』新泉社
- ¹⁰ 浅川繭子，2009，「子どもと保育者がともに主体である保育についての検討－自由保育と一斉保育の比較から－」『植草学園短期大学紀要』10，p67-78。
中村恵・小柳和喜雄・矢田匠・矢田明恵・古川恵美，2020，「共主体が育まれる学習環境の検討～フィンランドにおける対話による示唆～」『畿央大学紀要』17，2，p11-20。
- ¹¹ 厚生労働省「地域子育て支援拠点事業について」，<https://www.mhlw.go.jp/content/000963074.pdf>（2022/10/10参照）
- ¹² 同上
- ¹³ 三菱UFJリサーチ&コンサルティング，2018，「地域子育て支援拠点事業経営状況等に関する調査報告書」，https://www.murc.jp/uploads/2018/04/koukai_180420_c2.pdf（2022/11/10参照）
- ¹⁴ 無藤隆・安藤智子編，2008，『子育て支援の心理学－家庭・園・地域で育てる』有斐閣，p260

- ¹⁵ 大豆生田啓友, 2006, 『支え合い, 育ち合いの子育て支援－保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論』 関東学院大学出版会.
大豆生田啓友, 2007, 『50のキーワードでわかる子育て支援&子育てネットワーク』 フレーベル館.
- ¹⁶ 塚崎京子・山形明子・無藤隆, 2007, 「子ども家庭支援センターにおける広場の機能と広場利用の効果」『白梅学園大学白梅学園短期大学教育・福祉研究センター研究年報』12, p24-40.
- ¹⁷ 櫃田紋子, 2008, 「子育て支援における『ひろば』機能に関する一考察」『浦和論叢』38, p49-62.
- ¹⁸ 同上

(ひろた みなこ：非常勤講師)